第二言語学習における日本語外来語表記の実態と分析
—韓国語およびブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者の場合—

人間文化研究科比較文化学専攻
中東　靖恵

はじめに

日本語教育において外来語の問題は取り上げられることはあっても、それほど大きな問題としては扱われなかった。その理由は、日本語の外来語は英語出自のものが約 8 割と圧倒的に多く（国立国語研究所 1964)、さらに多くの国で英語が第 2 言語として学ばれていることから、その学習は外国人にとって比較的易しいと短絡的に考えられていたからである。しかし、現実には、英語を母語としない学習者は言うまでもなく、英語母語話者にとってでさえも決して容易ではない（カッケンブッシュ・大曽 1995、鄭 1995 など参照)。日本語の外来語の問題について日本語学習者の実態を中心に扱った論文はいくつかあるが、これを対照言語学的視点から研究した論攷は必ずしも多くはない。さらに、母語を異にする学習者の実態について対照言語学的に扱ったものは管見ではない。

このような状況のもと、本稿では、韓国語母語話者とブラジル・ポルトガル語母語話者の日本語学習者を取り上げ、英語出自の外来語表記に見られた特徴を明かにし、どのような点が問題となるのか、両言語母語話者ではどう異なるのか、また、それが両言語のいかなる特徴に起因するものであるのかを、音声的側面から、そして、母語における表記の観点から対照言語学的に考察する。

1. 調査の概要

①インフォーマント：韓国語（朝鮮中部方言）を母語とする者（以下、K 話者と略称）34 名とブラジル・ポルトガル語を母語とする者（以下、B 話者と略称）34 名。いずれも日本語日本文学専攻の大学 3，4 年生。

②調査方法：英語出自の外来語について、英語を与え、それにあたる日本語の外来語をカタカナで書いてもらった。例）bed　（ベッド)。

③調査年月：韓国：1996 年 9 月。ブラジル：1998 年 3 月。

④調査語：以下に調査語を示す。調査語は、原語の音節の少ない順に並べ、括弧内には日本語外来語表記を示す。調査語は学習者の既習語彙を中心に選定した。

1.bat（バット）　2.bed（ベッド）　3.cake（ケーキ）　4.coat（コート）　5.drive（ドライブ）　6.game（ゲーム）　7.glass（グラス）　8.news（ニュース）　9.building（ビル，ビルディング）　10.coffee（コーヒー）　11.copy（コピー）　12. fashion（ファッション）　13.guitar（ギター）　14.handbag（ハンドバッグ）　15.hiking（ハイキング）　16.jogging（ジョギング）　17.office（オフィス）　18.sweater（セーター）　19.taxi（タクシー）　20.radio（ラジオ）　21.supermarket（スーパーマーケット）　22.apartment house（アパート）　23.department store（デパート）

2. 調査資料の分析

K 話者・B 話者に見られた特徴のうち、ここでは以下の項目を取り上げる。

①調査原語に無声閉鎖音・有声閉鎖音を含む語の場合

②調査原語に/f/を含む語の場合　③調査原語に/dɪ/を含む語の場合

④調査原語に/æ/を含む語の場合　⑤促音/Q/について　⑥長音/R/について

2.1　調査原語に無声閉鎖音・有声閉鎖音を含む語の場合

原語に閉鎖音を含む調査語について、無声閉鎖音と有声閉鎖音を誤り、いわゆる清音を濁音を表すカナに、あるいは濁音を清音を表すカナに誤って表記した割合――例えば「バット」であれば、「パット」「ペット」のように語頭「バ」をパ行のカタカナで表記した割合――を K 話者、B 話者別に示す。なお、語末閉鎖音についてはここでは省略する。

語頭無声閉鎖音　K・B とも 0%　　語頭有声閉鎖音　K：16.5%、B：2.2%

語中無声閉鎖音　K：1.9%、B：0.8%　　語中有声閉鎖音　K：11.0%、B：3.7%

B 話者ではどの環境でも誤表記率は 4%未満ないし 0%であり問題とするに足りないが、K 話者の場合、語頭無声閉鎖音以外の音声環境ではその数値はいずれも B 話者よりも高い。この結果は、ポルトガル語が日本語・英語と同様、無声閉鎖音・有声閉鎖音の音韻論的対立を持つのに対し、韓国語がこれを欠くという音韻体系の差が反映したものと考える。なお、K 話者では、無声閉鎖音よりも有声閉鎖音で数値が高くなっているが、これには韓国語の外来語表記が影響しているだろう。英語の無声閉鎖音は語頭・語中を問わず、韓国語の激音で表記される。激音は強い気音を伴う無声音として実現されるため、これを濁音を表すカナで誤表記することは少なかったものと思われる。一方、英語の有声閉鎖音は語頭・語中とも韓国語の平音で表記される。平音は語頭で微弱な気音を伴う無声音として実現され、この音声は日本語の語頭無声閉鎖音に近い。語中で平音は有声無気音として実現されるが、無声閉鎖音と有声閉鎖音の対立を持たないK話者にとってそれが有声音であるという認識はない。K話者に見られた有声閉鎖音の誤表記はこのような理由によるものと考えられる。

2.2　調査原語に/f/を含む語の場合

英語無声唇歯摩擦音/f/を含む語として、coffee「コーヒー」、fashion「ファッション」、office「オフィス」を調査した。調査の結果、「コーヒー」の「ヒ」を正しく表記した割合はかなり高く、K 話者 67.6%、B 話者 100%であった。これは「コーヒー」が日本語学習の初期段階で習得され、かつ、使用頻度の高い語であることが関係しているだろう。

fashion、office の回答には、K 話者と B 話者とで違った傾向が見られた。B 話者では、fashion、office の/f/を含む音節を、それぞれ、「ファ」「フィ」のように表記した者が fashion で 94.1%、office で 63.6%であった。office の回答にはこの他、正答ではないが、無声両唇摩擦音[ɸ]で始まる「フ」を用いて「オフス」と表記した者が 27.3%見られた。これに対し、K 話者では、fashion を「パッション」「ペション」など、office を「オピス」「アピス」など、原語の/f/を含む音節をパ行のカナで表記した者が多く見られ、その割合は fashion で 64.7%、office で 91.2%であった。これは coffee の回答にも 29.4%見られた。

無声唇歯摩擦音[f]はポルトガル語にも存在する。そのため、B 話者にとり fa を「ファ」、

fi を「フィ」と表記することにはそれほど困難はなかったものと考えられる。一方、韓国語は日本語と同様/f/を欠き、日本語に現れるような[ɸ]も有さない。そのため、韓国語で[f]に最も近い音は、無声音であり、唇音性、有気性で[f]と共通する激音/pʰ/であり、韓国の外来語では外国語音/f/は激音/pʰ/で表記される（例：fashion [fǽʃən]→패션[pʰeʃɔn]、office [ɔ́fɪs]→오피스[opʰisɨ]）。K 話者に、英語/f/をパ行のカナで表記した者が多かったのはこのような理由によるものである。

2.3　調査原語に/dɪ/を含む語の場合

原語に/dɪ/を含む語として、department store「デパート」、radio「ラジオ」、building「ビルディング」を取りあげる。これらの英語/dɪ/は、日本語では「デ」「ジ」「ディ」の3通りで表記される。department store の/dɪ/の表記には、K 話者・B 話者ともに、「デ」の回答が最も多く見られた（K：62.5%、B：97.0%）。これには「デパート」が日本語学習の初期段階で習得される語彙であることのほか、原語の綴り字が de であることが働いていよう。また、B 話者の数値が K 話者よりもかなり上回るのには、ポルトガル語で語頭 de は[de]と発音される、つまり母語の発音と重なるためであろう。

一方、radio、building の/dɪ/の表記には、B 話者の多くが「ジ」ないし「ヂ」を当てている（radio：94.1%、building：64.7%）のに対し、K 話者ではそれは radio で 61.7%、building では 11.8%にとどまり、替って「ディ」ないし「デ」の回答が見られた。これには、ブラジル・ポルトガル語で di は[dʒi]と発音されること、韓国語では英語 di を디/ti/で取り入れていることが反映されているだろう。

2.4　調査原語に/æ/を含む語の場合

原語に/æ/を含む語として bat、glass、fashion、handbag、taxi を取り上げる。英語/æ/は日本語に/a/として取り入れられ、これらはそれぞれ、/a/を含むカナを用いて「バット」「グラス」「ファッション」「ハンドバッグ」「タクシー」と表記される。調査の結果、B 話者では/æ/をア段のカナで表記した者がほぼ 100%を占めるのに対し、K 話者ではそれは平均 68.2%にとどまり、その替りにエ段でカナ表記した者が 26.0%見られた。

韓国語外来語で、英語/æ/は通常애で表記される（例：taxi[tǽksɪ] →택시）。この애[ɛ]はかつて에[e]と音韻論的に対立していたが、現代の若年層韓国語話者ではその区別は失われ同音となった。その結果、애と에の音声は日本語の/e/に極めて近いものとなった。/æ/を「エ」段で表記した K 話者がかなり見られたのはそのためであると考えられる。それでもエ段よりもア段での表記が多くみられたのは、教育の成果とともに、America[əmérɪkə]→아메리카などの[ə]、及び、amen[ɑ́:mén]→아멘などの[ɑ:]には原語の綴り字として a が現れ、これらはいずれも韓国語の아/a/で表記されることが関係していよう。これに対し、B 話者の結果には、英語[æ]にはポルトガル語の[a]が対応すること（例：英 taxi[tǽksɪ]—ポ táxi[táksi]）、及び、ポルトガル語で a の綴り字は[a]と発音され（例：água [ágwa] 水）、この発音は日本語の[a]にほぼ同じであることが働いているだろう。

2.5　促音/ɑ/について

促音表記について、①促音の不要な箇所に促音を表記している、またその逆に②促音の

必要な箇所に促音を表記していないという 2 点から見る。①について、例えば cake「ケッキー」、copy「コッピー」のような回答は両話者に認められたが、それほど多くはなかった。むしろ②の方が問題が多く、「バッド」「ベッド」「ファッション」「ハンドバッグ」「スーパーマーケット」の促音表記を脱落させた割合を平均すると、K 話者 61.2%、B 話者 55.9%であった。促音表記については、促音挿入よりも脱落に問題が多いと言える。

2.6 長音/R/について

長音表記について、①長音の不要な箇所に長音符号あるいはそれに相当するカナを表記している、②長音の必要な箇所に長音符号あるいはそれに相当するカナを表記していないという 2 点から見る。①については、例えば guitar「ギータ」「ギイタール」、copy「カアヒイ」「コーピー」、glass「グラース」のような回答のほか、bed「ベード」、fashion「パーション」など促音を表記すべき箇所に長音符号を表記する回答が両話者に認められた。

②について、K 話者では長音表記の脱落はどの語においても高い（平均 53.2%）が、B 話者の場合、「コピー」「タクシー」「スーパーマーケット」では数値が高いものの、「ケーキ」「コート」「アパート」など他の語では脱落率は 10%以下であった。韓国語ではかつて 1 音節語に限り母音の長短の対立があったが、若年層話者を中心にその対立は失われている。したがって、K 話者にとり日本語の長母音と短母音の区別は非常に難しい。ポルトガル語には母音の長短による対立はないが、原則として後ろから 2 番目の音節にアクセントが置かれ、その音節の母音はアクセントの置かれない音節の母音よりも長く発音される。そのため、B 話者の場合、「ケーキ」「コート」のような後ろから 2 番目の音節に長音表記のある語については誤表記率が低く、そうでない「スーパーマーケット」では高かったのだろう。なお、「コピー」「タクシー」はポルトガル語で cópia、táxi であり、それぞれ、có、tá にアクセントが置かれて発音される。そのため、これらの語の語末長音の表記に困難があったものと思われる。

おわりに

以上、K 話者・B 話者に行った日本語外来語表記の調査資料により、両者に見られた特徴と、その誤表記の理由を対照言語学的方法によって分析し、日本語の外来語表記には、両言語の母語の影響が著しいことを明らかにした。母語の干渉による誤表記の要因は、両話者に共通するものもあるが、それはそれほど多くはなく、両言語の違いを反映して異なる場合が多い。

韓国語では調査語すべてが日本語と同様、外来語として取り入れられているのに対し、ポルトガル語ではそれは少ない。そこで K 話者は B 話者よりも、母語の外来語表記の影響を受けることが大きい。一方、ポルトガル語は英語と同じくローマ字表記であるため、B 話者の資料には、英語の表記をブラジル・ポルトガル語の発音で読み、それにカナを当てて回答したものが見られた（例：バチ：bat、コーチ：coat、ハウゼ：house など）。

紙幅の都合で、本稿で扱った 6 項目以外の特徴、例えば原語に/ŋ/、/nju/、/sw/、/eɪ/、/oʊ/などを含む語の場合については触れることができなかった。これらは機会を改めて述べたいと思う。